

阪本敏三

“西本阪急”の初代盗塁王

【元阪急-近鉄-南海。81年引退】

阪急ブレーブスの盗塁王と言われ、13年連続で獲得した福本豊のイメージが強いが、その記録がスタートする前年(69年)、制約の多い二番打者でありながら盗塁王を取った男がいる。いくつかの球界の「伝説」と交わる不思議な運命を持つている男でもあった。

「ほんとに元やっていたんやね。山田 捕れんかったのかな。捕ったら何もなかったんやけどね」笑いながら写真の打球を指差す。巨人・長嶋茂雄の打球が阪急・山田久志の左を抜けていく。捕手側から見た1枚だ。

1971年、巨人との日本シリーズ。西本幸雄監督のもと67年初めての優勝を飾り、そのままパ・リーグ3連覇をした阪急だったが、日本シリーズではすべて巨人に敗れている。1年空け、これが4度目の挑戦だった。1勝1敗で迎えた第3戦。中1日で登板した山田が立ち上がりから快投を見せる。8回までヒット2本の無失点。味方も1点のみだったが、そのまま9回裏へ進む。勝利は目前だった。

二死一塁の場面。長嶋が放ったボテボテのゴロが山田の左へ飛び、阪急・ショウ、阪本敏三がそれを追う。間に合うかと思ったが、阪本のグラブはわずかに届かず、打球はセンター前へ転がり、二死一三塁。そして、続く王貞治がサヨナラ本塁打。山田はその場にうずくまり、西本監督にうながされるまで動かなかった。球史

に残る名勝負として今も語り継がれているシーンである。「定位やつたら捕れた。あのとき守備位置を2、3歩、三塁に寄せたんや。長嶋さんが本かレフト線へのファウルを打ってて、引つ張ってきてるのが分かったから。次の新聞見たら「緩慢プレー」と書かれていた。違ふよと思っただけ。言える雰囲気じゃなかったね」

後述するが、阪本は球史に残る3つのシーンに関係している。それも「伝説」と呼ばれるビッグシーンに。京都市伏見区出身。伏見稲荷の裏山が遊び場で、走り回っているうちに、知らず知らず、体が強くなっていった。高校は平安高校。61年、3年生の春には一番ショウでセンバツに出場し、準々決勝で柴田勲(のち巨人)がエースの法政二に1対10で負けたが、4打数4安打と一人気を吐いている。しかし、3年生の夏は京都府大会で1回戦負け。平安にとつて32年ぶりの屈辱だった。「まあ、油断やね。当時、平安フアンって多かったから、負け



俊足巧打のショートとして息の長い活躍をした(BBM)

た後、球場でフアンが騒いで、なかなか帰れなかったよ」卒業後、立命館大に進み、すぐレギュラー。7季連続盗塁王、通算60盗塁の記録を残す。

「60盗塁は知ってんだけど、7季連続はプロに入ってから聞いた。盗塁って表彰もなかったからね。大体7シーズンういても、1年の春から4年の春までか、1年秋から分かんらんや(笑)」

大学卒業時、65年には第1回ドラフトで東映に5位指名されたが、断る。「まだ自信がなかった。それで河合楽器に行ったんやけど、1年目で阪急に指名され、このときは来年ケガでもしたら、もうプロには行けんかもしれんと思つて、あわてて入った」

「なぜかプロになって増えたけど、僕の打球はフェンスに当たると、1年目、打率・27.2、9本塁打。三塁打7はリーグ1位だ。僕はバッティングに苦しんでた。このときは、いつもなんでか打たない。当時ショウは2割3、4分得意と言われてたよ。生意気やけど、打てるショウやと思つてた。三振も少ないやろ。当てにいくわけやないよ。体は小さいけど(1770センチ)、バットを長く持つてしっかり振るほうやったからね」

※この連載は隔週です。引退した選手の第2の人生に関し、何か情報がありましたら〒101-8361 週刊ベースボール「想い出球人」係までお寄せください。

「生意気になったから(笑)。3年続けて結果出せたら、何もせんでもいけるわって。高校のときと同じ油断やね」盗塁も28と減っているが、「それは調子やうよ、あいつが出てきたからやね」と言う。福本豊、世界の盗塁王だ。この年、75盗塁で初の、そして13年連続盗塁王のスタートを切った。ただ、阪本も翌71年には36盗塁。福本は67盗塁だが、一番と二番の違い、さらに成功率福本・82.7、阪本・85.7)を見ると、この時点で大きな差があったわけではない。

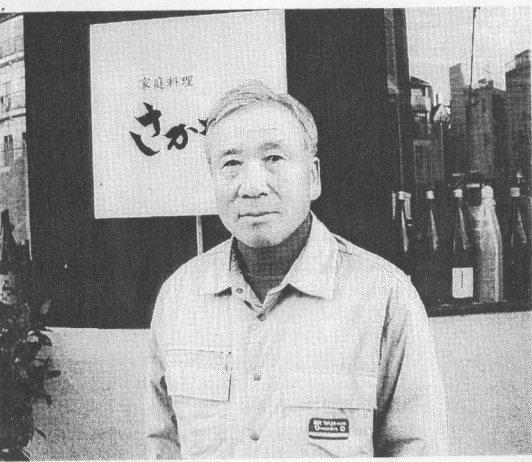
「ほんとに元やっていたんやね。山田 捕れんかったのかな。捕ったら何もなかったんやけどね」笑いながら写真の打球を指差す。巨人・長嶋茂雄の打球が阪急・山田久志の左を抜けていく。捕手側から見た1枚だ。1971年、巨人との日本シリーズ。西本幸雄監督のもと67年初めての優勝を飾り、そのままパ・リーグ3連覇をした阪急だったが、日本シリーズではすべて巨人に敗れている。1年空け、これが4度目の挑戦だった。1勝1敗で迎えた第3戦。中1日で登板した山田が立ち上がりから快投を見せる。8回までヒット2本の無失点。味方も1点のみだったが、そのまま9回裏へ進む。勝利は目前だった。二死一塁の場面。長嶋が放ったボテボテのゴロが山田の左へ飛び、阪急・ショウ、阪本敏三がそれを追う。間に合うかと思ったが、阪本のグラブはわずかに届かず、打球はセンター前へ転がり、二死一三塁。そして、続く王貞治がサヨナラ本塁打。山田はその場にうずくまり、西本監督にうながされるまで動かなかった。球史

それを若手の「踏み台」的な位置づけでもある。近鉄3年目の78年、出番は43試合のみと減り、オフ、西本から「スカウトをせんか」と言われた。「まだ選手で居られる自信があったから南海へ移籍させてもらった。この年も結構、打ったよ。使ってくれたらやれると思つた。何でか打てたらからね」この年の6月26日、古巣の近鉄戦だった。勝つて同点で近鉄の前期優勝が決まる。「僕が同点で打に出た。いややったよ。近鉄にとって絶対のチャンスやし、西本さんの思いも分かるじやない。打てんかったら、やっぱり元近鉄やから手を抜いたと言われそうだしね」南海の勝ち越しと思つたが、センターの平野光泰が完璧な返球をし、二走の定岡智秋がホームアウト。平野の返球は、魂のバックホーム。とも言われ、これも球史に残る「伝説」となった。「近鉄が引き分けて優勝、平野も一躍有名になったし、僕にとつても西本さんにとつてもよかつた。いい思い出だね」

その後、近鉄はプレーオフで後期優勝の阪急を破り、12球団で一番遅い引退を決めた。81年途中、引退を決めた。「年齢的には37歳やからもうええかなというところやけど、何度か言うけど、バッティングはまだ自信あつたよ(笑)」引退後、3年間の解説者生活を経て、近鉄でコーチに。その後、編成部長、寮監と近鉄で定年までを過ごした。「長いのは近鉄だから、どこのOBかと言われたらやっぱり近鉄。でも、どのプレーヤーやと聞かれたら阪急。僕の青春時代みたいなもんやからね」

話を聞いたのは西宮市の夙川駅から少し離れた住宅街にある、内装工事中のフロア。表には「さかもと」の看板が出ている。「1月にオープンです。僕がやるわけやないよ。女房が家庭料理の店をやりたいと言うんでね。こんな住宅街のなかでうまく行くかとも思うけど、僕は止められないから(笑)。仕入れくらい手伝おうと思つてますよ」で、本人はと言えば、「この間、作つて出した名刺に「京都府KIBALL少年野球連盟理事」とあつた。「硬式と軟式の中間くらいのボールを使うんや。高校でいきなり硬式を始め、肩やヒジを壊す子供は多いからね。僕は野球が好きだし、声を掛けてもらつたんやから、できる限りのことはしたいと思つてますわ」

「伝説」の男はそう言つて笑つた。(文中敬称略)



1月中旬オープン予定の家庭料理の店「さかもと」の前にて。実質的には奥さんが切り盛りし、阪本は「ちょっと手伝うだけ」と言う